

AUKUSと日本外交

山上信吾・駐オーストラリア日本国大使

9月16日は豪州にとって歴史的な日となった。英国、米国との新たな安全保障パートナーシップ(AUKUS)の創設が発表され、米英両国の協力を得て原子力推進型潜水艦(原潜)の導入を進めることになったからである。一部に誤解もあるようなので、キャンベラの外交最前線の空気を紹介したい。

特別寄稿

【1】豪州にとって必要な新型潜水艦

豪州新型潜水艦の開発は、2016年の競争入札の結果、日本やドイツのオファーを抑えフランスが契約を受注した。日本側関係者の無念の思いは、今も鮮明な記憶だ。一時は「そうりゅう」型導入に前向きだった豪州に対し、日本の強い失望の念が伝えられた。

しかし、日豪は「特別な戦略的パートナー」。インド太平洋地域の平和と安定を支える責任がある。いつまでも不平をかこつのでなく、戦略的大局に立って、豪州との安全保障面での協力を着実に進展させる道を日本は選んだ。この振る舞いを評して、ある豪州政府高官は私に対し「雅量に富む対応に感謝している」と述べた。

フランスとの契約は難航してきた。予算は当初見積もりを大幅に超過、納期は遅れ、現地生産は進まなかった。同時に、インド太平洋の戦略環境が年々厳しさを増しているため、必要とする防衛力の再検討が行われた。もともと巨大な島国として広大な海域をカバーする豪海軍にとって通常型潜水艦よりもスピードや持続性に優る原潜が望ましいという議論はあった。そのためには、原潜技術を有する国の協力が不可欠だった。

【2】日本はAUKUSを歓迎

フランスとの契約を破棄し、米英の協力を得て原潜を導入するとの方針転換は、その機微な性格上、水も漏らさぬ統制が敷かれ極秘裡に進められた。

モリソン首相をはじめとする豪州政府高官は、日本を含む限られた少数の国に対してのみ事前通報を行った。外交上のやりとりであり、豪州、第三国との関係もあり、詳細に立ち入ることはできないが、日本への対応は丁寧なものであった。

早速、9月17日に茂木外務大臣からペイン外務大臣に対して、日本がAUKUS創設を歓迎する旨を伝え、24日にワシントンで行われた首脳会談において、菅首相からモリソン首相に対して歓迎の意が伝えられた。日本の素早い前向きな対応は、豪英米いずれからも感謝された。日本にとっては、豪州の原潜導入により、南シナ海、東シナ海、日本海などで海上自衛隊と共同行動をとる余地が一層広がることが期待される。

また、契約破棄に対するフランスやEUの反発がインド太平洋での同志国の連携を損なわないよう働きかけをするのも、日本の役割と心得ている。

AUKUSでは、まず豪州の原潜導入が焦点。今後18カ月かけ、原潜の技術・運用経験を有する英米と豪との間で具体的な詰め作業が行われる。AUKUSの協力分野には、サイバー能力、AI、量子技術なども挙げられている。そうした分野での協力を日本と行いたいとの声も聞こえてきている。

なお、日本にはこれまでも米国の原潜が寄港している。豪州原潜の日本周辺海域での活動によって、地域における抑止力が高まることが期待される。

【3】クアッドとAUKUS

9月24日には、日米豪印4カ国(クアッド)の首脳会合が初めて対面で開催された。数十年後に振り返った時、間違いなく大きな分水嶺として位置づけられるだろう。インド太平洋地域の主要国たる4カ国の間で今後毎年会合を重ねていくという将来の道筋が合意されたことに、歴史的意義がある。

クアッドとAUKUSは、排除し合うのではなく、補完的な関係にある。AUKUSの焦点が、防衛・安全保障にあるのに対し、クアッドは「自由で開かれたインド太平洋」を実現するための手段(vehicle)であり、対象分野は防衛・安全保障に限られず、インフラ開発、テロ対策、サイバー・セキュリティ、貿易・投資、人道支援・災害救援など、多岐にわたる。

【4】重層的な取り組み

「自由で開かれたインド太平洋」の実現は、クアッドやAUKUSのメンバーだけで完結するものではない。ASEANやEUといった同志国の協力を得つつ、強力で推進していくことが重要になる。

この関連で、環太平洋パートナーシップ(TPP)拡大の重要性にも言及したい。今般、中国と台湾が加入申請を行った。他のアジア諸国も関心を示している。そうした中、かつてTPPを主導した米国がその重要性に目を向けるのは時間の問題であると期待する声もある。日豪両国の働きかけが重要な所以である。

【5】最後に

このように、キャンベラの日本大使館は、積極的に対外発信に努めるとともに、豪州のみならず関係国と緊密に連携し、精力的に外交を進めることが求められている。後者はいわゆる「アヒルの水かき」と称されるものである。喧伝されることもなければ報道されることもない。愚直に見えようが、地道な努力を営々と重ねていきたい。(山上信吾・駐オーストラリア日本国大使)